今年8月9日のポンポン劇場の様子（都島図書館）

大型立体紙芝居「ポンポン劇場」作者兼演者

内藤（ないとう） 磯美（いそみ）さん

プロフィール

1927年、大阪市生まれ。45年、市内の劇場の大道具係として、舞台背景画などを担当。46年ごろから兄の日用雑貨店を継いで経営に当る一方、漫画を描きはじめる。この漫画は3冊の単行本として出版された。以降は商店経営に専念していたが87年、大型立体紙芝居を発案。日本昔話をメインに創作を次々と発表し、図書館や老人ホームなどで年間90回を超すボランティア公演を続けている。

子どもたちの笑顔がある限り紙芝居を続けますよ

都島区役所庁舎に隣接する都島図書館。絵本に囲まれた閲覧コーナーで、毎月第2水曜日の午後開催される紙芝居が評判となっている。なぜなら、普通の紙芝居を頭に描いていると、カルチャーショックさえ受けかねないアイデアが盛り込まれているからだ。

まず、舞台となる木枠が幅2m近いジャンボサイズ。43cm×63cmと普通サイズの倍ほどもある絵も、観音開きでワイドな場面に変わったり、一部分をめくると主人公や動物が現れるなど、ポップアップ絵本を思わせる仕掛け付き。ポスターカラーで描かれたカラフルで純朴な絵柄とあいまって、子どもたちを昔話の世界へと誘う。名付けて大型立体紙芝居、「ポンポン劇場」。この作者兼演者が内藤磯美さんである。

訪れた日の演題は日本昔話のひとつ「うぐいす長者」。一つの蔵の絵を、中央から観音開きにすることで5つの蔵の場面に変えたり、春の季節のシーンでは、桜の花びらを模した紙ふぶきを散らせるなどの演出もあり、「わぉー」と驚いたり歓声を上げる子どもたちで大賑わいだ。

◇張り出された絵が自信に◇

大阪市西区で生まれた。小学5年生の図画の時間。読本どおりに水彩絵の具で描いたサザエとアワビの絵が教室に張り出され「僕も絵が描けるんやと自信を持った（笑）」ことを覚えている。以後、絵を描くことが楽しみとなり、「本の隅に、ぱらぱら漫画をよく描いたものです」。

両親がタバコ店を経営していて、タバコ輸送用の紙箱がいつも積んであった。その紙箱を切り抜いて枠を作り、「観劇して感動した宝塚歌劇の、舞台模型をつくることに熱中した」という時期もある。クレパスで背景を描き、折り紙や千代紙を貼り付けた華やかで立体的な舞台…。立体紙芝居創作のヒントがこれだ。

舞台づくりといえば、45年に北区の北野劇場（当時）で大道具係として舞台背景を描いた経験も。劇場は、実兄の店舗を引き継ぐため約1年で退職したが、「その後に描いた漫画が3冊、単行本として出版され書店に並んだ」というから、漫画の腕はすでにプロ級だったのである。

◇テレビの紙芝居に"キュン"◇

紙芝居に取り組んだのは、60歳のころだ。ボランティアで紙芝居を演じる母親たちの姿を描いたテレビ番組を見て「体に電気が走るような感動を覚えた」のがきっかけ。翌日から店番の合間を見て「こぶとりじいさん」などの昔話を描き、作品をストック。店に来るお客さんの勧めで幼稚園で公演をしたのが評判を呼び、口コミで依頼先が増えるのである。

現在、作品は日本昔話から芥川龍之介の「杜子春（とし しゅん）」まで、創作15作を含めて53作品。公共施設を中心に、年間約90回のボランティア公演をこなしており、絵の描き方やストーリーの作り方を学ぶ紙芝居講座の講師も務めている。

12月には79歳になる。健康の秘訣を「紙芝居で大きな声を出すこと」と言い「喜んでくれる子どもたちの笑顔がある限り続けます」と内藤さん。紙芝居への情熱は高まるばかりである。

（文・脇本勤／表紙写真　高島悠介）

P20にポンポン劇場（都島図書館）の案内があります。